

THE
JAPAN
INTERIOR
DESIGNERS'
ASSOCIATION

JID

no. 61

1973. Aug. 20 th.

昭和48年8月20日発行

目 次

主集・協会賞をめぐって	
協会賞のあり方・光藤俊夫	1
資源開発と技術とデザイン・大日方秀夫	2
家具の歴史館	3
ウォールシステム談義・清水武	4
商業施設連情報・デザイン・イヤー報告	6
海外短信・かるてっと	8
だんわしつ・賛助会員名簿・編集後記	10

協会賞のあり方

光 藤 俊 夫

いろいろな団体や企業から出されている各種の賞をひろいあげると、かなりの数にのぼるだろう。政府から贈られる、どちらかと言えば一般にはなじみのうすいものなどを加えると、定期的に実施されているものだけでも、100や200でしかないのではないかな。

そんなにたくさんの賞があっても、中々順番がまわって来ないのは、当然のことながら賞に値するような良い仕事をしていないせいにはちがいない。

とは言っても、中にはちょうどいようにもちょうど出来ない、きわめて専門的な分野のものもあるので、必ずしも受賞の機会がオイソレと転がっているわけではない。やはり余程の業績がなければ賞などいただけないと知るべしであろう。

ところで、賞には一種の「おしらせ」的要素が含まれていて、ときに、伝達される範囲の広狭によっては全く意味をなさない性格のものがある。

功成名遂げた人たちへの功労賞的なものはともかく、さしづめ当協会の

賞のような作品賞的なもの、それも一般の人たちの生活と密接につながり得る仕事の上での良い成果に与えられる賞など、大いに世に喧伝されなければ、その役目は半減する。

このことは賞を「与える側の論理」が確立していてこそ果されることであって、実は「与えられる側」には何のかかわりあいもないことかもしれないが、受賞者への拍手は、「ここに良いものがありますよ」というアピール、それも迅速且広範囲に、そして積極的に果されてこそ大きな意義があるのではないかな。

もちろん受賞者の次の仕事への励みを補うことも出来ようし、たとえば交際度を高めるのにも、何がしかの助けにはなるだろう。しかしおそらくは賞状や賞牌が象徴するような抽象的なものではなく、それが多くの人たちに愛され活用されるものになることの促進剤としてのメリットに期待したいであろう「与えられる側」にとっては、まさに「与える側」の態度こそ問題であ

るにちがいない。

さいわい、すでに4回を重ねるインテリア・デザイナー協会賞にとりあげられた各賞は、すぐれた審査員諸氏によって、妥当且適確なものが選ばれて今日に至っている。しかし必ずしも、「おしらせ」的要素が完全に果されているとはいえない。

つまりは協会の周辺だけに限られた、ごく内輪の祭事でしかない賞になってしまったのでは「与える側」の一人よがりのそしりはまぬがれないし、「与えられる側」にとってもやりきれないだろう。

せっきくの賞である。あらゆる機関を通じて大いに喧伝すべきであると思いうし、そのことによって対比させられるであろう一般の目との間に、母体である協会の存在意義が、どのようなカタチの楔で打ち込まれ得るか試してみたい時期ではないかと思うのだ。

資源開発と技術とデザイン

大日方 秀 夫

すべての産業はその終局目的が人類福祉の増進にあり、また、すべての技術はこれの推進が目的であらねばならない。工芸の本質が伝統技術の正しい伝承と新技術開拓にもとづく新商品の開発にある以上、資源開発即ち材料研究と技術、デザインは当然表裏一体のものであり、決して分離検討さるべきものではなからう。

社会機構の複雑化、技術水準の高度化による研究態勢の専門、細分化は当然のことではあるが、基礎知識、基礎技術の積み重ねなくしては所詮いかなる新技術、新商品の開発もなしとげられるものではない。

最近、ともすればこの本道を踏みはずし時流におもね、やすきにつく風潮が工芸界にみられることは遺憾である。私は一見はなやかにみえる木製品一流デザイナーたちの裏面には木材料基礎技術への絶えざる追求と労苦がひそむことに万腔の敬意を表するとともに、今後の若い人々に材料研究にはじまる一連の真剣な基礎技術研究を切に望みたい。暴言多謝。私達公設試験研究機関はこれらの人々に対して全面的協力が最大の任務である。未利用材といわれ、低質材と見做された“カラマツ”材の脱脂技術の開発を主体とする材質改良研究に10年余の年月をかけたのもこれが理由である。

世に木材資源の涸渇が叫ばれてからすでに久しい。木材需給のバランスは木材生産国よりの輸入により、その均衡がころうじて保たれているのが現状である。しかし、昨年各木材生産国すら資源不足に対処しての規制が計画され、問題はいいよ深刻の度を深めて

いる。

かつて、世界有数の木材生産国と他国から羨望された美しく、豊富な山林資源はもう存在したい。先人から受けついだ貴重な遺産をより良い姿で後世にひきつぐべき責務をもつ木材工芸関係者にとっての大きな失態ともいうべきであろう。成長産業とうたわれ、生産性の向上、新デザイン開拓の上づいた声のもとに狂奔し、原材料の効率的利用法をおろそかにした結果といえよう。

木工製品の先進国といわれる北欧諸国の工芸事情、デザイン事情を視察した人は数多い。そしてその人々に目を見張らせたのは製品の良さ、デザインの新鮮さもさることながら、それ以上の感銘は木材料の高度利用にちがいない。単に北欧諸国が広葉樹資源にめぐまれないからとの理由ですましてしまうには余りに重大な問題である。これらの国々の木工技術者、デザイナー達の心の底に流れる貴重な資源に対しての高率利用の尊い精神と、これについての技術開拓の熱意をまづ取りあげるべきであろう。官民あげての材料研究、資源開発こそこれらの諸国の工芸発展最大の基礎といっても過言ではあるまい。

また、住居建設好調の波にのり次々に発表される、いわゆる新商品も消費者不在、使用者疎外のそしりをまぬがれないのではなからうか。高級化の美名のもとに次第に大型化され、デラックス化されていく家具は一般住居スペースとのバランスを保ちえず一般家庭から敬遠の声さえ出ようとしている。

某著名雑誌に「洋服ダンスほど馬鹿げた家具はない」と発表された事を忘れてはならない。これも幾多の先人たちが永年の努力のすえにかつての特権階級独占から大衆の家具に発展させ家具本来の姿に立戻らせた功績に対しその本道を踏み外したものとさえいえる。

家具は大衆のものであり、大衆の支持によってこそ発展すべきものである。研究者、生産者、デザイナーと消費者の完全な意志の統一によってこそ今後、順調な発展が期待されるべきであろう。工芸は本来きわめて地味な存在であり、なかでもデザインはあらゆる基礎知識集約の所産というもっとも労多かるべき分野である。思いつきや、単純な計算で完成するべきものではない。資源開発、加工技術研究、消費者動向の調査、生活環境の検討等一段の努力をとくに若いデザイナーに望みたい。

今回受賞の対象テーマとなった「カラマツ」材の脱脂研究は私の30年の工芸生活の所産であり、その成果はたとえばささやかなものであるにしても、他に先がけて着手し、全くオリジナルな材料を工芸界に提供しえたことは、工芸の本道を歩みつづけた誇りと、さらに第二、第三の材料開発に強い意欲を感じさせるものである。さらに、また、今回の推せんが日頃良き師と仰ぐ先輩デザイナーの人々によることはこの受賞が一段と意義深く感じられ、心から謝意を表する次第である。

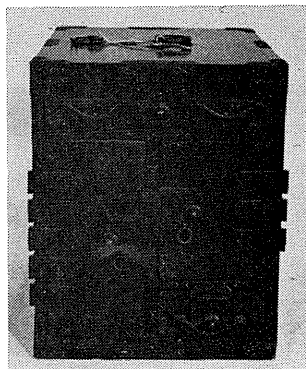
大日方秀夫氏は「脱脂からまつ材による一連の家具」によって松村晴男氏、城北木材加工有限会社と共に協会賞を受賞。長野県工業試験場、研究技監工芸部長。

「家具の歴史館」を企画して

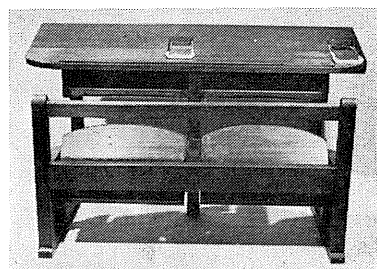
狩野 雄一

●居住形式の二つのパターン

もう拾年以上も前のことであるが昭和36年2月→3月JETROの海外特別市場調査員として1ヶ月の訪米旅行と、昭和38年9月→10月当協会主催のヨーロッパ視察団長としての海外旅行を通じて一つの大きな感激とショックをうけたものである。それはアメリカに於てもヨーロッパに於ても共通して強く感じたことはいずれも家具についての立派な博物館をもち祖先が永い歴史形成の中で用いてきた生活用具としての家具を保存展示していることである。たとえばアメリカ、シカゴにあるシカゴ博物館 (chicago Natural History Museum) では西部開拓時代の居住様式の展示、パリー、ルーブル美術館 (Mesec du Louvre)、ロンドンの大英博物館 (British Museum)、ことに印象的なのはスウェーデンストックホルムにあるノルデイスカ博物館 (Nordiska Museet) に附属するスカンセン (Skansen) で知られている広大な郊外博物などである。古代からの北方民族の住居がつくられ生活様式の実態が示されていたのには最大の敬意と一種の羨望のようなものをもったものである。当時わが国の家具業界は量産一辺倒で、年々20%~25%の成長性と生産性を誇り無我無中で量産に進んでいた頃であった。こうした博物館にのこるものと自己の日常生活用として家具を尊重し価値づける住民 (国民) の姿勢と、その民度に頭の下る思いがし、これこそ文化の高さを示すものとして夢からさめたような感にうたれた。ところで西欧ではこのような道具や家具が博物館をもつほど尊重されるのであろうかと考えさせられた



船算筒 (懸硯)
江戸時代の千石船で用いられたもの
書類の収納が目的で現代の金庫



学校家具 (松本開智学校)
明治初期の木工によるもの。量産家具として現代のIDの家具デザインの先駆である。

ものである。

それには一つの理由がある。住居形式としてパターンには二つのタイプがある。つまり日本型居住形式と西欧型居住形式のパターンである。前者は休息面には畳 (床面) があり、室の収納空間には「押入れ」があり、又室の中心や上座を示すものに床の間などがある。しかもこれらはすべて建築の一部分である。それに対して後者では休息面では座家具を必要とし「収納」にはチェスト或はワードローブ、タンス類がなり、室の中心、上座を示すものにサイドボード装飾などあり、つまり室の最終機能は家具によって決定される。

したがって日本型は建築的であり西欧型は家具的であるということが出来る。そこで西欧型住居では家具には互に生活史、住居史、風俗史的な意味があるのである。ところがわが国の住居はここ拾数年の間に西欧型パターンとして急速な早さで家具化 (インテリア化) しつつあることは、ことの良否は別として否定できない。そしてわれわれもその一端を担っていることもさけられない事実である。

昨今わが国の家具産業は木製家具だけでもすでに5000億円産業といわれその他金属、プラスチックなどの諸材料の家具を入れれば有に7~8000億円の膨大な産業となっている。しかし乍らはたして、その内容と質において西欧のごとき後世にのこして、はずかしくないものがどれだけあるか、反省せざるをえない現状である。

●伝統→継承→創造

後世になって1700年代の家具産業成長期が問われ、語られるとすれば、その時代に生をうけていたスペシャリストとしてわれわれはこれでよいだろう

か？

私はその時わが国の過去の歴史の中に生れたすぐれた家具を収集しかつ保存未来の創造に結びつけることは一つの「継承」としての義務であると思っている。しかしこの希望は永い間実現夢みていたが仲々その機会を与えられなかった。たまたま数年前 J. F. C (Japan Furniture Center) が、この家具繁栄期の中で建物の利用主体が商品の販売目的の展示のみに用いられていることは企業の社会的使命や責任が問われている現在さらに一步を進めて「家具の歴史館」として一部を使用し、そのことによって家具の本当の意味と発展の経過を示し家具の文化的意義を一般ユーザーにPRする。そのことは家具の息の永い発展につながることになる。幸に経費はF社の社長I氏の理解ある善意にまつこととなった。

永い間の企画が実現のはこびに向うことになった。この実現には予想以上の困難があった。しかし以前からこの面の研究を熱心に続けていた協会の中村圭介氏、泉修二氏、家具、室内史の研究家、鍵和田務 (職業訓練大学校助教授) 家具、住宅史の研究家の小泉和子氏 (東大建築科建築史教室) の協力者をえたことは感激にたえないことです。しかし、年表の作成などに以外に時間がかかり、加えて実物展示品の収集に当って丁度数年前から考古調ブーム、民芸ブーム、その上骨董趣味の抬頭から営業人による障害によって一層と収集の困難が加わりかつ価値的収集品が散逸してしまっていたことはかえすがえすも残念であった。今にして思えば、もう拾年早くこの企画を実行すればよかったと反省している。

(8頁につづく)

ウォールシステム談義

清 水 武

戦禍の荒廃の中から立上ったヨーロッパ諸国が先づ第一に直面した重大な議題は、多量且急速なローコスト住宅の生産であった。中でもソ連邦をはじめとし、東西両ドイツ、北欧諸国ならびに英国等に於て、ある程度相互間の技術交流のもとに、目ざましい開発が進められた。わが国に於ても戦後独自の量産方法が研究されてはいたものの、その間10年にわたる技術的ギャップは何ともなしがたく、即ち昭和30年頃からはじめて政府建設省を中心として大手建設企業でもきそってそれらの技術導入にとりくみ、35～6年頃から主として西独、一部ソ連、英国等からPCパネル生産機械があいついで導入され生産が開始された。しかし大手各社の輸入機械は前述の理由から所詮大同小異、その後各社各様に部分的に改良されてはいるものの、そのプロセスにいたっては現在もなお互に大差ないのが現状である。したがって工期的にもボルトネックとなっているウォールシステムの技術開発こそPC業界に君臨する王座えのみちにつながるわけである。

PC工法の世界的傾向は下割工法即ち経済性居住性から除々にPCパネルの大型化がすすめられ、わが国においても同じくその最大のねらいは即ち現場工程のスピード化、パネルが大きいからジョイント部が少くなるといったいわゆる省力化経済性が格段に向上されると同時にワンハウスワンルームシステム即ち設備固定部をのぞき間仕切を可動化フレキシニ化することにより、家族構成に準じて或は居住者の希望に応じた各種のプランが準備出来居住性にフレキシビリティがいちぢる

しく増大し快適な生活をエンジョイ出来るまでにいたった。ウォールユニットのフレキシビリティに準じた窓の位置及照明空調に対する問題は既に躯体を形成するパネル設計の段階で大部分解決済である。

空襲を受けなかった米国では帰還兵^{フーバイフォア}の為の独立ハウスに2×4工法から発展した木質系F型パネル工法がもっぱらでわが国にも導入されPC系に比べてウォールシステムの組合せがきわめて容易でPCにもまさる明るい将来が期待される。

ストレージ・ウォールはストレージをもたない単独ウォールと結合されて初めて相乗的なその意義を発揮するものでこれに準じた単独ウォールシステムが開発されなければ意味がなくこれも近く市場化されるはこびになっている。

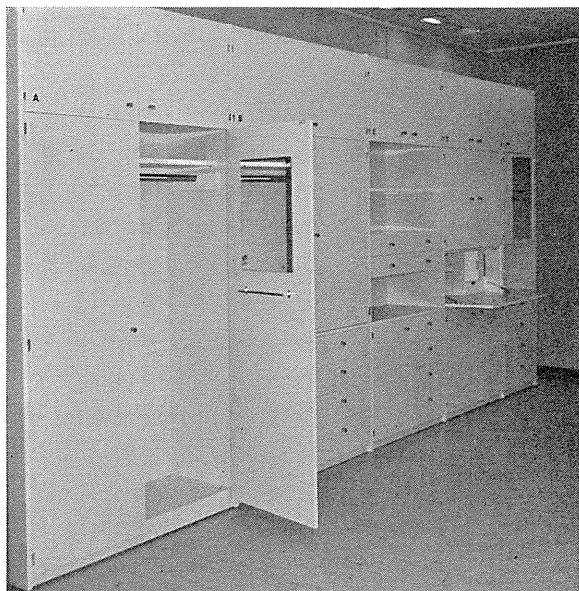
筆者はPCパネル工法が初めてわが国に導入される前後からフレキシブルウォールのユニットシステム化に強く興味をもち、その後大手の設計部門で10数年にわたり地みちな開発研究を重ねて来たがひるがえって業界の現実を直視するとき今もってこれらの国産技術に見るべきものさになく、といって自ら開発にとりくむだけの意欲すらなく、いたずらに不適切なジョイントメカニズムに又驚くほど高価な輸入品や導入技術に追従し、ただ腕をこばねている業界のふがない現状に強い義憤を感じるものはあながち私ひとりだけであろうか、政府提唱のローコストハウジング政策のてまえウォールシステムを高価な輸入システムやメカニズムに依存することも出来ず、躯体に比べて中身はいたっておそまつで10年1日の如き手工業に依存せざるをえず、ウォールシステム等到底望む可くもない現状を直視するときまことに残念至極と云わざるをえません。

これにはかつてわが国のこの種の技

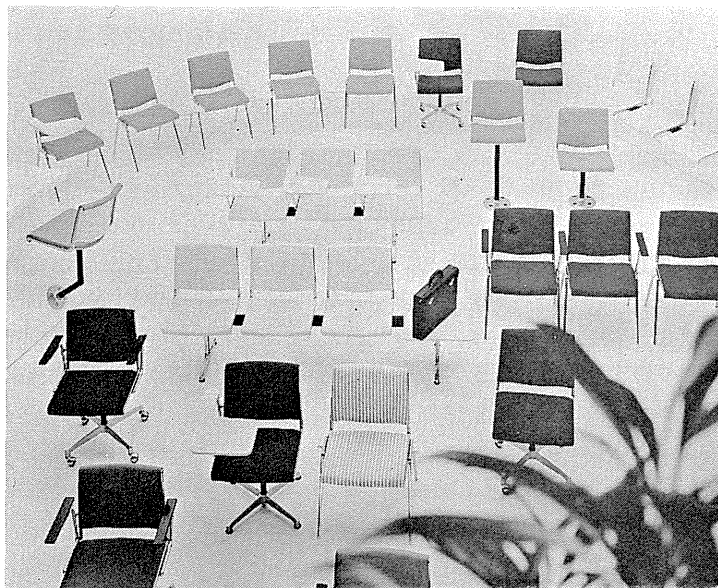
術者教育政策にも重大な欠陥があったことを卒直に認めざるをえません。即ち将来集合住宅の内装造作ウォールシステム等の関連技術者は特に、海外第一線級の技術者がそうであり、かつてあった様に、建築に関する基礎教育が絶対必要不可欠であってさらにすすんで、建築者としての実務キャリアを合せもつことが最も望ましい、従って第一線クラスのデザイナーは可成の高年層少くとも中年以上にならざるを得なくなる訳で、古くはグロピウス、コルビュジエ、ミース、剣持、プロイヤー、アルトー、フィンジュール、ハンスワグナー、イームズ、ネルソン、サーリネン、ヤコブセン、ケアホルム等々、皆しかり、ローマは一日にして成らず、只一度だけの人生、砂上楼阁の愚をあえてしないことである。

私の母校をほこる気持はさらさらないが千葉大では我々の時代からすでにこの教育方針で一貫しており諸先生先輩諸兄の先見の明にいまさら頭が下る思である。ねこもしゃくしも世はあげてインテリアばやり正に百花繚乱の観あり誠に結構ではあるが、世のいわゆるインテリアデザイナーもしくは、と称するたぐいの人々よ、ガムをかんでゴーゴー誠に結構だがもう少し建築を勉強しなさいと叫ばざるをえない。建築的バックボーンのないインテリア等断じて存在しないことをふかく銘記すべきである。若い世代の方々にさらに切望したいこと一つ、古きよき伝統の中ではぐくまれたヨーロッパ的インテリアの沿革と歴史を十分にダイジェストし美しい日本独自のものをクリエイトしてほしいと切望して止まず、意味なきイミテーションに追従した国辱的なデザインのハンランに心をいためる者少くとも小生只一人だけであってほしいと心から願わずにはおられません。

このたび当JID72年度協会賞を、



システム収納家具



マルティ・システム・チェア

大阪デザインセンターでグッドデザイン賞をいただき誠に身に余る光栄と存じふかく感銘いたしております。併しながら如何にすぐれたアイデア企画であってもその価値と意義を認識し市場化する心ある企業の英智と決断がなければ単なる路傍の石でしかありえない訳である。ウォールマスターの企業化に非常なる熱意を示され協力いただいた内外木材工業の先見と英智に心から敬意を捧げる次第です。

同社は御承知の如く歴史（創立明治38年）と伝統高い技術水準をほこる業界最大の企業で新宮殿内装工事の大半を特命工事で完成せしめたことでもその業績の一端がしのばれる次第、又同社が大手大林組の直系であることも周知のことで同じく私も大手S社の出身であることもくしき因縁だと思っている。

前述した様に業界すべての企業の発展の為にひたすら平等な技術ノウハウを提供することを第一の信条としている私共のこの純粋な主旨に対し心ある企業の提携を切に期待して止まない次第です。

なお50件に余る関連工業所有権の外

ノウハウ等が心ある企業のコンタクトを期待しています。なお米英加西独にパテント申請中で目下海外のある企業とシステムを含む技術輸出の交渉が初められています。

市場公開後これを追って業界に静かなブームを呼びおこし明るい将来が約束されている様で誠に喜ばしい限りであります。

清水 武氏は、「システム収納家具のデザイン」によって、協会賞受賞。プレインテリア建築デザイン事務所代表。

作れば売れる……への恐怖

長 岡 貞 夫

アルミダイキャストチェア『マルティ』が、愛知株式会社より発表されてから9ヶ月。まずは順調な需要に支えられて推移しているところで、ことさらムキになる必要もなからうが、今回

のようなビッグプロジェクトの中で得た感慨、教訓といったものは、そう度々経験できるものとは思えないので、あえてこの紙面で述べさせていただくことにした。

規模、種類を問わず日本の家具メーカーは、昨今なかなか好況だそうである。かなりの設備投資も、人件費の大巾増も吸収して余りあるとは、同慶至極である。

しかしである。私はこの業界の将来に対しては、残念ながら悲観的である。メーカーが駄目になっては、我々デザイナーとしても我が身に降りかかる火の粉であって、おだやかではない。

私が悲観視する理由はこうである。

- ・生産コストの高騰は今後も続く
- ・原材料の入手が困難になる
- ・ユーザーの情報摂取が進み、その国際化が著しくなる
- ・メーカーに企画能力が乏しく、先行投資意欲に欠ける
- ・他産業からの進出が増加する

いわば家具生産の分野にあっては、日本は明らかに後進国としか思えない
(9頁へつづく)

全国商業施設 関係団体連合会発足す

——商業施設技術士の資格制度化——

創 立 宣 言

本日ここに「全国商業施設関係団体連合会」を創立いたしました。

私共は専門職能技術者の技術と業務を確立することによって、健全な都市環境の育成に寄与し、もって商業施設にかかわる技術者の責任体制を明確化するよう活動することをここに宣言いたします。

昭和48年5月18日

冒頭の一文は、去る発会式（於帝国ホテル）において可決された一文であります。当協会としては、当初からインテリア関連団体として参画し、今日、第2種会員でもあります。ここに代議員の一人として（他に岡村実氏、中村圭介氏）当連合会の経過について報告いたします。

1. 設立経過の概要

本連合会設立についての組織的活動は、関係者相互の事前の意見交換を主とする予備協議を経て、正式には昭和47年1月24日、関係11団体による関係団体連絡協議会の発足に始まり、以来現在まで約1半年にわたる準備活動をしてきました。

この準備活動は、約8ヶ月間の連絡協議会としての問題把握を主とする活動と、のちの8ヶ月の設立発起人会としての問題整理、施策の具体化を主とする活動とに要約されています。

この間、準備活動は二つのテーマを中心に進められ、その一つは、商業施設専門技術者の必要知識要件の研究設定であり、他の一つは、連合会の目的事業、その他組織運営制度の確立についてであった。これらの大綱については、これまでに指導行政機関である建設省および通産省主務部局の了承、ならびに設立当初参加全員9団体の合意

に達したものであります。

2. 準備確認経過にての活動内容

これら活動を通して、連合会設立発起人会（発足昭和47年9月14日）レベルにての各種の問題なり提案が審議され活動の柱ともなってきた。

(1) 連合会設立への問題一般

これらについては、大略下記の通り。関連行政庁への要望書提出のこと。事務局の設置、準備業務体制の整備。広報の発行。事業計画、予算の検討。定款等重要事項の再検討。社団法人の申請手続、主務官庁との接洽・整備。

(2) 商業施設専門技術体系編成執事についての件

いわゆる、専門技術知識としてどの程度の内容と範囲をもたせるべきかの問題であります。そのために、

専門技術体系編さん委員の委嘱と基本姿勢を討議している。上記の通り。

奥脇文彦・松本次郎・森喬・出利夫・中村圭介・遠藤雄二・小浜昭造・狩野雄一・喜多村哲・志賀祥隆以上10名

（役職名、敬称略・順不同）

全科目にわたる原案をもとに、技術大系の主旨、編成内容について各委員が詳細に検討し、現在原稿執筆中。

(3) 専門技術者教育認定制度について
最も重要なこととして資格認定をどうもってゆくか。そのためには、必要知識の既得評価基準をいかにチェックするかであります。そして、資格認定とともに再教育の問題も検討されているのであります。

その他には、各種関連業務がありますが、以上の経過を骨子として今日にいたっております。

次には、各種の事業計画（案）について抄録しておきます。

昭和48年度事業計画（案）

1. 商業施設専門技術体系の編さん

発足当初から建設省、通産省担当部局の指導助言をあおぎ細部にわたって

検討され、下記のような体裁として進められている。

監修・建設省・通商産業省

校閲・豊口克平・松田逸郎・遠藤雄二

名称・商業施設専門技術体系3巻

第1巻・施設計画総論

第2巻・施設計画各論（業種別）

第3巻・施設計画製図、施設製作施工

各巻B5、合計約450ページ

この技術体系は、関連職能技術者またこの職能を志す者にとって唯一の主たる教材となるものである。

2. 教育認定制度の確立

主要事業のひとつで、専門技術者の教育、考查認定、登録などの必要な実施基準を制度的に研究確立しようとするもの。

3. 専門技術者の教育・認定の実施

上記の教育制度要綱に基づく当年度第1次教育研修を実施するもの。

4. 連合会業務の普及啓蒙

当初隔月間の広報を発行し、参加団体構成員への趣旨徹底をはかるなど。

5. 社団法人の手続、取得ほか

終りに、会の構成内容については、

■連合会会長・村上末吉 副会長・中村圭介（敬称略）

■第1種会員

- 全国店舗設計装備協同組合（9）
- 日本インテリアデザイン協会（10）
- 日本店装士協会（4）
- 協同組合全日本店装チェーン（3）
- （社）日本店舗設計家協会（6）
- （社）日本ディスプレイ業団体連合会（10）
- 日本ディスプレイデザイン協会（4）

■第2種会員

- 日本マネキンディスプレイ商工組合（3）

○当協会（注）（ ）内の数字は代議員数（当協会代議員 尾上孝一記）



着々進むデザイン関連事業

公害や環境破壊の問題をはじめ、人間生活のあり方を考えなおさねばならないようなさまざまな問題がクローズアップしている今日、デザインの立場から、より積極的な探索やはたらきかけが必要になってきている。

デザイン・イヤーが、このような時期に行なわれる意義はまことに大きいといわねばならない。しかし、すでに4月にはじまったデザイン・イヤーは、目下のところ盛り上に欠けているかのように見える。これは計画段階での時間的な問題や、予算上の見とおしが充分でなかったことなどによって、いささか始動がおくれてしまったため、10月、11月の中心的な行事の時期には、大きな盛り上りとなるよう運営会の下で各事業の実行委員会、募金委員会及び事務局は活動が続けている。

●世界インダストリアル・デザイン会議

10月8、9日の東京・京王プラザホテルでのICSID第8回総会のあと、11、12、13日の3日間京都国際会議場で開かれる。メインテーマは“人の心と物の世界”で、5つの講演と12の分科会からなる会議を中心として行なわれる。世界各国から500人以上の専門家の参加がきまっているが、英国の作家でジャーナリストのアーサー・ケストラー、フランスの社会学者ジャン・ボードリアール、アメリカの経営コンサルタントのバーナード・ミューラータイムらの講演の他、スイスの建築家・彫刻家のマックス・ビル、アメリカのデザイナーのチャールズ・イム

ーズらの来日も予定されており、大きな成果が期待される。

●展示事業

デザイン・イヤーの基幹事業の一つとして、主要八都市で10月～12月にデザイン展が開催されることにきまつた。高密度社会を背景とする私たち日本人の生活をテーマとして、各デザイン分野からの提案が練られている。さらにGマーク商品の歩みをたどる展示も合わせて行なわれる計画である。

東京展 10月9～14日（科学技術館）

札幌展 10月18～23日（丸井今井）

仙台展 11月9～14日（藤崎）

名古屋展 10月6～11日

（愛知県産業貿易館）

岡山展 11月9～14日（天満屋）

高松展 11月30日～12月5日

（高松市立近代美術館）

大阪展 10月18～23日（阪神百貨店）

北九州展 11月9～14日（井筒屋）

●協賛事業

4月以来すでにいくつかの協賛事業が行なわれてきたが、来年3月までに全国で多数の展示会、セミナー、講演会あるいはコンペ等が行なわれることになる。7月には当協会関西支部によるインテリア・イメージ'73が兵庫県立近代美術館で開かれる他、8月に日本パッケージ・デザイン展（京王）9月に山口フェアショー（日生ホール）、デザインフォーラム'73（銀座松屋）、カワシマTEXTILE MILLS（科学技術館）、10月に日本のタンス展（晴海JFC）、色彩総合展（伊勢丹）等が予定されている。コンペとしては世界サイクル・デザイン・コンペ、世界陶磁器デザイン・コンクール、雑貨デザイン・コンクール、国際照明デザイン・コンペ、毎日インダストリアル・デザイン賞、毎日広告デザイン賞などがある。

●広報事業

デザイン・イヤーはデザイナーだけ

のお祭りではなく、一般の人たちの理解や参加の中で展開されなければならないという考えに立って各種の企画が進められている。

ポスターは福田繁雄氏デザインの一次のものにひきつづいてマークを主体とした第二次を準備中の他、記念たばこの発売にともなうポスターが9月頃店頭には貼られる予定である。

新聞、TVを通じての広報活動も計画されているが、毎日新聞では7月14日に特集を組んだ他、NET・TVでの番組などの予定がある。またJETROとのタイアップによる映画製作もシナリオを作製する段階に入っている。

直接一般の人たちが参加できるようなイベントもいくつか計画中で、9月以降にはより活潑な展開が見られることであろう。

デザイナーや関係団体等を主な対象とする機関誌として、デザイン・イヤー・ニュースが発行されているが、来年3月までに12回出されることになっている。（渡辺 優記）

当協会としても活動が活潑になるにともなって会員の協力、参加の必要の度合がたかまっているが、デザイン・イヤーについての情報をより詳しくキャッチされたい方は、デザイン・イヤー事務局の榎田均氏（当協会員）に連絡されるとよい。

デザイン・イヤー事務局

世界貿易センタービル別館4階

（東京都港区浜松町2-4-1）

電話（03）435-6078

“第1回アメリカ デザイン会議”抄録

大 和 保 雄

アメリカ合衆国大統領ニクソン氏の胆入で設立された“Federal Council on Arts & Humanities”主催により、去る4月2日ワシントンにおいて、第一回アメリカ・デザイン会議が開かれた。この会議の発端は、1971年にニクソン大統領が、政府各機関の長官に対して“芸術、デザインをいかに活用するか”について報告の提出を求めたことにある。

その報告には政府の建物、事務所のインテリア、視覚伝達物のデザインの質の改善をはかりたいという希望が圧倒的に多かった。これに対し大統領から次の如きメッセージが出され、会議設立の運びとなったのである。

大統領メッセージの要約

① Federal Council on Arts & Humanities (以下FCAHと略す)に依るデザイン会議の組織作りをはかること。

②芸術に対する国家資金機関の指示のもとに、政府庁舎の新築改築等に関する指導要項の再検討を1962年より推進。

③同じく政府印刷物に対するグラフィック・デザイン計画の強化。

④芸術家、建築家、デザイナー使用のための政府人事院の採用手続きの再検討。(以上)

デザイン会議の主催者であるFCAHは政府各庁から代表12名が選ばれこの会の運営資金はNational Endowment for Artsより支出されている。そして又会議の目的に到達すべく、National Endowmentは、全国関係機関に対しこの会議に関するプログラムについての助言を与えた。

今回のデザイン会議はこの線に沿った最初の第一歩である。会議の運営は

政府代表8名、民間代表のデザイン専門家5名で構成された運営委員会によって推進され、今回の会議開催を提案した。会議の予算は\$100,000である。

第一回デザイン会議のテーマは“デザインの必要性”にせよ、1)公共施設の効果的デザインは、即ち公共サービスであること、2)デザインはぜい沢や装飾品ではないこと、3)グッドデザインは金と時間を節約し、政府の諸計画の効果を強めるものであることを確立することにあった。

第一回アメリカ・デザイン会議の出席者は政府各省の次官クラス、幹部職員、代議士、知事及び各州の芸術関係代表者、新聞記者及びデザイン専門家約1000名であった。

〔会議の経過〕

1日目

- 議長あいさつ
- ニクソン大統領からの激励文の発表
- モービル・オイル会社会長特別講演
- 短篇映画の上映

第2日目：“ケース・スタディ・セクション”

視覚デザイン、インテリア及び工業デザイン、建築、ランドスケープ・デザインの各分野から選ばれた講演者12名により、それぞれの立場からみた“デザインの重要性”について、スライド併用による講演が終日行われた。

各講演者の氏名及び演題は次の通りである。

- Louis Dorfsman氏“トレードマークの効用”
- Saul Bass氏“人に与える会社のシンボルマークの重要性”
- Niels Diffrient氏“人間工学人体の寸法”
- Robert Propst氏“室内スペースと家具什器の関係”
- Eliot Noyes氏“IBMのデザイン計画に参加して”

⑥ Gerald Mecue氏“広場と建物との環境システムについて”

⑦ Robert B. Marquis氏“サンフランシスコの住宅街の広場のデザインについて”

⑧ Bill N. Lacy氏“印刷物のデザインについて”

⑨ M. Paul Friedberg氏“ストリート、ファニチュアの良い例悪い例について”

⑩ Phillip H. Lewis, Jr.氏“ハイウェイのデザイン、特に道路標識の良い例悪い例”

⑪ John E. Hirten氏“空港、特にワシントンのダレス空港システムのデザインについて”

(3頁からつづく)

「家具の歴史館」の主題テーマを伝統→継承→創造と打出した、これは、「家具の歴史館」が単なる懐古的趣味と伝統を觀賞するという手段的なものでなく「継承」を通じて新しい「創造」への糸口としたいことである。

「温古知新」(古きをたずね、新しきを知る)この古語は今にも生きていくことである。こうして4ケ年の歳月を経て昭和47年11月16日オープンしたものである。しかし収集品の範囲、種類、量などはまだ決して満足のものでなく歴史館の性質上これからも収集活動を継続していくのは当然であり、収集品の情報などについては、この機会に会員の御協力をお願いしたい。尚今秋10月中旬からデザインイヤーの協賛事業として「日本のタンス展」の特別展を開き、年代別、地区別に展示し、日本のタンスなるものをもう一度み直してみたいと思います。御覧いただければ幸いです。

狩野雄一氏は“家具の歴史館”家具保存協会顧問として、泉修二、鍵和田務、加集喜雄、小泉和子、中井太一郎、中村圭介の諸氏と共に豊口克平、山口勇次郎、新庄晃の諸氏の協力、フランスベット株式会社後援のもとに活動された。協会賞は特別賞としてフランスベット株式会社社長に授与された。

活気あふれる九州

福岡市天神街、ショッピングセンターの着工や、川端商店街の開発など、また50年頃、新幹線の開通をめざして、目下めまぐるしく都市開発がなされています。

昭和51年度位までは、福岡市に於ける我々の仕事も、ピークに達するものと思われまふ。この様な中で、支部事務局を預りまして、協会の発展と共

に、協会会員の増強をはかるのが、事務局のつとめですが、会員も何かと忙しく、仕事におわれ、会合も5～6名で開くというのが現状です。

会合内に於ても、企業内デザイナーと独立デザイナーとの相違は多少表面に出て来ているようですが……。

めまぐるしく動く会社動向の中で、真のデザインの発展と、進歩をめざして、インテリアデザイン——それ自体の方向付けをしてゆかなければ、協

会自体の発展は、望まれないと思えます。

——さて、近く、7月28日、J I D、J C D、九州クラフト協会、福岡デザインコミュニティの主催により、講演会を開催致します。

講師＝栄久庵憲司氏、泉真也氏

インテリアデザイナー協会九州支部の発展の為、今後共御支援と御協力をお願い致します。

(九州支部 白川雄渾記)

すすむ事業計画

●6月28日(木) P.M.6:00より支部例会をエデッパハウスに於て開催。当日は夕景になっても一向に衰える様子もない名古屋特有の蒸し暑さの中を、会員11名が参集。本年度後半の事業計画等につき盛んな討議が行われた。

主な事業計画は次の通りである。

- ・見学会(金沢を予定)……<8月下旬>
- ・デザイン実技講座……<9月上旬>
- ・展示会(ニッポン・グッド・デザイン・ショー出品)……<10月上旬>
- ・デザイン懇談会……<10月上旬>
- ・研究会……<2月中旬>

又、支部の活動を今後一層積極的且つ円滑に推進させるため、専門部会を発足させることとした。部会は下記の

三専門部会からなり、会員全員がいずれかに所属し事業計画の実施にあたる。

・運営推進専門部会

松本政雄、若園晃、林寅正、本多正之、宇賀敏夫、池田高明

・企画研究専門部会

堀内啓二、安藤清、長坂信、八代美智子、服部敏行、玉置勇一、内田次彦、瀬十記夫

・調査情報専門部会

後藤勝男、藤原庸弘、黒野敬三、坂本竹三郎、中里信正、杉谷賢一、葭原基、小松暁一、石田忠昭、富川斉宮坂博文、岡嶋敏弘 (敬称略)

●「現代に生きるデザイン講演会」を7月30日(月) P.M.1:00より中日新聞社6Fホールに於て開催。この講

演会はデザイン・イヤー協賛事業として、世界インダストリアルデザイン会議実行委員会の協力により行ったもの。共催は中日新聞社、J I D A、J I D他。講演内容は(1)栄久庵憲司氏「世界インダストリアルデザイン会議と今後のデザインのあり方」、(2)泉真也氏「地域社会に於るデザインの役割」、(3)中原佑介氏「現代文明とデザインについて」

講演会終了後、中日パレス6F桃の間に於て、講師並びに共催関係団体会員等50名が出席して懇親会が行われた。

(中部支部 池田記)

(5頁よりつづく)

のである。後進性とは、模倣することにとめられを感じず、技術上の障壁を回避するような安易な生産態度が、堂々とまかり通っていることにある。

これらに対する反省が表立っていないのは、前にも述べたように、とにかく作れば売れるというありがたい環境にあるからで、国際的な需給市場の中で日本の家具業界を見つめたとき、背筋の寒くなる思いがするのである。

このような業界に、好むと好まざるとにかかわらず密着した我々デザイナー

も、大いに責められるべきかと思うが、現実の企業が抱くデザイナー観、デザイナーとのかかわり方、一歩進めて家具におけるデザインそのものの認識に、先進諸国との格差を強く感ずるのである。

『マルチ』の開発にあたっては、当会「第3回研究発表要旨録」で述べたが、企画・立案の時点から完成まで、メーカーの経営・技術陣の家具に対する深い理解と、周到かつ勇気ある決断に支えられ、デザイナーとして幸運であったと思う。

しかし、今回の作業に従事しつつ、業界全体を見渡して、雑白ではあるが以上のような感を深くし、デザイナー共々現状への認識を新らたにすべきである、と強く感じたのである。

長岡貞夫氏は「マルティ・システム・チェア」によって、アイチプロダクトチームと共に協会賞受賞。長岡デザイン事務所自営。

資格制度化と再教育への提案

—これからの協会の在り方—

尾上 孝一

近年における、わが国の急激な経済社会の成長とそれにとまなう日常生活における各種の歪みは、益々これからの人間生活への警鐘となってひびいてきております。とくに、消費生活の拡大への一助をになった多くのデザイン運動も、あらためて、反省をうながされてきているといっても過言ではあるまい。ここに、これからの協会の在り方をさぐる上で大きく二つの点について一考してみたい。

そのひとつは、資格制度化とその波紋、ひとつは、デザイナー自身の再教育の問題。

(1) 資格制度化とその波紋

これについては、本号にでも報告しておりますが、ここで、創立趣意書からの一文を借用してみたい。

「近々20年の急速かつ独得な発展過程の中で、これらの商業施設と考えられるものの計画・生産を支えてきた職能は、これまでの建築・家具・工芸・グラフィック・その他の工業製品制作などの技術分野、ならびに商業経営管理の専門分野のそれぞれが、創意と工夫による発展的な対応を迫られ、短時間の間に、一つの新しい専門職能界を成立させる素地を培ってきました。」

これらの一文に集約されているように、デザインという虚像の中で百鬼夜行の如く徘徊（はいかい）し、その栄華をほしいままにしてきた時代から、今や、地についたデザイナー自身の実像を見つめる時代にさしかかっているといえよう。

デザイナーの資格とは、また、つかみにくい要素が多い。デザインのもつ行為そのものが、ある時は独善になったり一人よがりになったりする点、ま

た、普遍性の名をかたりながら客観性にとぼしくなりやすい点などがあること。そのため、一定水準の知識となると、やはり、技術的な面も大いに加味しなければならないのではないのか。

そして、創立趣意書にても「専門職能技術者の技術水準の確保と関係企業の業務水準の確保」を問題としていることなど。

これは、技術水準とは何か、どの程度の範囲を把握しておくのかなどと、確保するとはどんな方法でおこなうのか、とくに、日進月歩といわれる今日においては、などが資格制度化以後の問題としてもちあがっている。

一方では、これら資格制度化に疑問をなげかけている向きもあろう。これらの疑問をなげかけている人々にとっては、現実になくとも堂々と仕事をこなして活躍されているという確かな現象から全く必要とされないのであろうが……。

閑話休題。

ひとたび、資格の先輩格である建築士の当面する問題をひろってみよう。

（東京建築士会機関誌「建築東京」1973. 7月号より）

イ. 建築士活動の専門化、細分化により、建築士の責任は単独責任から複合責任制に転じつつある。

ロ. 建築士の質の向上に伴ない、基準行政の一部を建築士に任せようとする動きがあるが、一方では違反建築、公害、環境問題等、建築士の各種法令に関する無理解、無関心が原因で社会に対して建築士の信用を低下させる事例が多い。

これら建築士の言葉をデザイナーにおきかえても、文意にさしたる相異を感じ得ないのは私一人だけではあるまい。

すなわち、現実には甘んじて遠き将来にわたる大局を見失なわないような視座の在り方を一考すべき時期にきたと

いえましょう。

さて、問題をもどして技術水準の在り方にふれてみる。

これは、さる連合会報告にもある通り、各種の教育材料—技術大系を作る—ことによりひとつの目標を設定することとして進められております。

また、確保するについては、現在では、各団体単位とし団体の責任において資格を設定しよう。だから、いずれかの団体に所属することが必要な最低条件、しかし、将来にはたしてこれでよいのか。とくに、全国的な規模となっていた場合には、など問題は山積しておるといえましょう。

また、何年かごとに資格を再認可することとか、内装制限の強化にとまなう教育内容の周知徹底のことなど、資格を健全かつ社会に確実に定着させてゆく努力が必要とされている。

これは、デザインという行為が技術という知識の中で一人前として社会に確実に根をはやすか否かの試金石ではないだろうか。ややもすれば客観性にとぼしいといわれるデザイン業務に、今一步の前進かつ社会的な責任を付加する事業ともいえまいか。会員諸兄の格別の自覚と努力を通して、すみやかな発展に寄与したいものである。

(2) デザイナー自身の再教育問題

今日の各種生活空間の内容は、多様化とともに技術的にも高度化されてきております。とくに、各種災害防止の観点から、内部空間施設のあり方が大きく問われてもきております。

いわゆる、デザイナーのもつ社会的責任とその認識こそ、真に社会に定着し人間生活にとっての利益に合致する専門職能の確立へとつながるものとなるのではないのか。これらデザイナー自身の問題は、より広くより大きくかつより深く、人間生活のあり方の全ゆる側面にかかわってゆくものでありましよう。

賛助会員紹介

朝日木工株式会社 豊川工場
愛知県豊川市豊川町幾通り15
豊川 (05338) 6—4171

株式会社 コスガ
東京都中央区東日本橋2—15—4
東京 (03) 862—6711

株式会社 天童木工東京支店
東京都港区芝浜松町2—11
東京 (03) 432—0401

飛驒産業株式会社
岐阜県高山市名田町1—82
高山 (0577) 32—1001

富士ファニチャー株式会社大阪支店
大阪市福島区上福島北2—89 淀川ビル3F
大阪 (06) 531—9740

ネコス工業株式会社
横浜市戸塚区飯島町久保890—1
横浜 (045) 851—5761

古川工業株式会社
大阪市大淀区中津浜通4—5
大阪 (06) 371—0849

株式会社 ホウトク
名古屋市中区錦2—15 協銀ビル
名古屋 (052) 201—4101

フランスベッド株式会社
東京都昭島市中神町1148
昭島 (0425) 43—2111

株式会社オリエンタル中村百貨店
名古屋市中区栄3—5—1
名古屋 (052) 251—2111

株式会社 大丸装工部
大阪市南区鰻谷中ノ町38
大阪 (06) 252—0641

国際インテリア株式会社
東京都豊島区南池袋1—18—21
東京 (03) 983—9151

株式会社 モダンファニチャーセールス
東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル
東京 (03) 211—8351

日本総業株式会社 (エアボン)
東京都港区麻布飯倉片町10
東京 (03) 582—3341

クラレ・インテリヤ株式会社
東京都港区六本木5—2—1
東京 (03) 403—9721(代)

株式会社 ホクサン
東京都江東区木場3—15—4
東京 (03) 641—5111

株式会社 木利屋
東京都港区新橋3—6—7
東京 (03) 503—1920

三好木工株式会社
東京都文京区湯島4—9—2
東京 (03) 813—5481

愛知株式会社
名古屋市東区赤萩町3—8
名古屋 (052) 941—6226

株式会社 寿商店
東京都千代田区有楽町1—14
東京 (03) 591—1311

株式会社 セミカインテリア
東京都豊島区南池袋1—18—21
東京 (03) 984—2211

チトセ株式会社
東大阪市玉串町東2—1—1
東大阪 (0729) 62—1141

住江織物株式会社東京支店
東京都港区西新橋3—23—1
東京 (03) 433—4171

トーソー株式会社大阪支店
大阪市城東区古市南通3—20
大阪 (06) 939—5721

東洋紡インテリア株式会社
大阪市北区梅ヶ枝町108
大阪 (06) 361—6771

長谷虎紡績株式会社
大阪市東区横堀2—10
大阪 (06) 203—5921

藤井毛織株式会社東京事務所
東京都中央区日本橋堀留町2—3
東京 (03) 663—6631

内一商事株式会社東京営業所
東京都荒川区東日暮里6—36—12
東京 (03) 802—4471

株式会社 カワキチ
東京都新宿区西大久保2—223
東京 (03) 209—7001

株式会社 サンゲツ
名古屋市区小舟町2丁目14
名古屋 (052) 565—1133

アイカ工業株式会社
愛知県西春日井郡新川町西堀江2288
新川清洲 (0560) 40—5311

住友スリーエム株式会社
東京都港区赤坂7—1—21
東京 (03) 403—1111

東洋ゴム工業株式会社
大阪市西区江戸堀上通2—5
大阪 (06) 441—3580・8801

富国株式会社
東京都中央区日本橋小伝馬町2—2
東京 (03) 662—1901

株式会社 高島屋
大阪市南区難波新地6—14
大阪 (06) 631—1101

株式会社 高島屋東京支店設計部
東京都中央区日本橋通2—5
東京 (03) 211—4111 内2157

株式会社 ニック (N I C)
福岡市中央区天神1—11—17 福岡ビル
福岡 (092) 77—2234

株式会社 ハヤミズ家具センター
東京都台東区下谷2—7—2
東京 (03) 876—1111

揖斐川電気工業株式会社建材事業部
岐阜県大垣市神田町2—1
大垣 (0584) 81—3111 内線368

株式会社 トップトーン
東京都葛飾区東四つ木3—44—15
東京 (03) 692—9097(代)

株式会社 佐野紙芸インテリア事業部
京都府亀岡市曾我部町犬飼馬の上1
亀岡 (07712) 3—0661~4

佐治タイル株式会社
名古屋市中区山田町3-106
名古屋 (052) 981-9531

東濃陶器株式会社
岐阜県土岐市駄知町1435
土岐 (05725) 9-3131

株式会社 アイ・エム・エス
東京都港区南青山4-21-27
東京 (03) 402-1855

株式会社 日建設計
大阪市東区横堀2-38
大阪 (06) 203-2361

株式会社 カファドハウス
東京都港区西麻布2-13-12 早野ビル
東京 (03) 407-2428

株式会社 竹中工務店東京支店
東京都千代田区神田錦町1-9
東京 (03) 294-2111

株式会社 ファースト東京支社
東京都港区赤坂4-1-32 赤坂ビル6F
東京 (03) 585-2046

株式会社 商園
東京都渋谷区東1-26-26 富士ビル8F
東京 (03) 407-8171

有限会社 フカツ商店
静岡県静岡市中島390
静岡 (0542) 82-3681

株式会社 小川商店
東京都渋谷区松涛2-18-2
東京 (03) 460-5771

株式会社 川島織物東京営業所
東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビル5F
東京 (03) 580-4511

株式会社 東光堂書店
東京都中央区日本橋通1-5 中内ビル
東京 (03) 272-1966

日本電気設備株式会社
大阪府東大阪市花園西町1-14-11
東大阪 (0729) 61-6321

松下電工株式会社
大阪府門真市大字門真1048
大阪 (06) 908-1131

ヤマギワ電気株式会社
東京都千代田区外神田4-1-1
東京 (03) 253-2111(大代)

ヤマギワ電気株式会社 各古屋支店
名古屋市中区新栄町6-9
名古屋 (052) 931-2111

共同通信工業株式会社
東京都千代田区内神田1-17-11
東京 (03) 292-7671

株式会社 松坂屋
名古屋市中区栄3丁目16-1
名古屋 (052) 251-1111

株式会社 新宮商行東京支店
東京都中央区日本橋1-3-13
東京 (03) 273-7841

株式会社 フジエテキスタイル
東京都渋谷区千駄ヶ谷4-7-12
東京 (03) 403-3371

株式会社 アルフレックス ジャパン
東京都港区北青山3-5-6
東京 (03) 403-5351

新 加 入

中央設備エンジニアリング株式会社
名古屋市中村区笹島町1丁目223
電話 (052) 582-8201

日本ビクター株式会社デザイン部
横浜市神奈川区守屋町3-12
電話 (045) 441-1291

内外木材工業株式会社東京支店
埼玉県入間郡大井町亀久保1150
電話 (0492) 61-3611
同社東京支店分室
東京都千代田区内神田1-14-8
長谷川第5ビル
電話 (03) 292-3841~5

株式会社 三平興業装飾部
東京都千代田区岩本町1丁目5-13
電話 (03) 862-6161

共同印刷株式会社
東京都文京区小石川4-14-12
電話 (03) 813-1111 (内線439)

■金あつめの下手な財務委員で一向に役に立っていないのに、今度又会報委員も兼ねることになり、原稿集めの方にも精出さねばならなくなりました。よろしくお願いします (光藤)
■集めるということは何ごとによらず大変なこと、今回の新編集員集めの労を取ってくれた事務局長は、協会最寄りの住人を選んだ割には大変なベテランを見つけてくれたもので古顔は心強い。(加藤)

編 集 後 記

■協会最寄りのベテランとはどうやら当方のことらしいのですが、前号のJIDも読んでいない不勉強者。何卒よろしくご指導の程。(長谷川)
■猛暑の毎日、今日はちよっと涼しく、仕事も一段落し、のんびりと編集会議に遅れて出席、ベテランの登場で大いに緊張して写真の割付けを手伝わして

いただく、よろしく再教育の程を。

(山)
■委員会に久しぶりに出席。ベテラン新委員の参加と海外旅行ボケで何も手伝わず申し訳けない。来号より海外デザインとロマンを連載?。(高田)
■新しきメンバーも加え編集に喝をときめ細かいテーマをつみ上げて、地についた言葉を定着させてゆきたいものデザイナーの社会的責任も含めて、より深くより大きく踏み出すか。(尾上)

機関誌・JID Vol.14 No.61 定価 200 円
昭和48年8月発行 印刷 広洋印刷(株)
発行所 社団法人 日本インテリアデザイナー協会
(〒150)東京都渋谷区神宮前2-3-16建築家会館3F
振替・東京・76389番 電話 (03) 403-3649

発行人・白石勝彦 編集 社団法人 日本インテリアデザイナー協会 会報委員会
担当理事 川上信二・川崎浩
委員長 (関東) 尾上孝一●三宅征郎・加藤卓子・光藤俊夫・高田紀久枝・山岸征史・泉修二
(関西) 本田安治●柏原秀夫 長谷川紀子
(中部) 林寅正●八代美代子・若園晃・宇賀敏雄・安藤清
(九州) 白川雄渾・香川寿一
JAA-Bldg., 3-16, 2-chome, Jingumae Shibuya-ku, Tokyo, Japan.

The Japan Interior Designers' Association